

⑦ 熱傷（やけど）

- 流水で痛みがなくなるまで患部を冷やす

- ①熱傷は6ヵ月～1歳6ヵ月の子どもに多発し、部位別には手のひらや指が多いのですが、手の熱傷は後遺症（細かい動きが制限されるなど）が残りやすく、注意が必要です。
- ②体表の10%以上の熱傷（現場では子どもの手のひらが1%、腕1本、足1本が各10%として、大体その受傷面積を計算する）はショックを起こす危険があり、入院が必要となります。
- ③熱傷の深さによっても症状は変わってきますが、熱傷の深さは24時間～1週間程度たたないと医師でも正確に診断するのは難しいため、その日のうちに皮膚科または形成外科を受診して、経過をよく観察しておく必要があります。

■ 熱傷の深度と応急処置

熱傷の深度	皮膚の外観	障害組織	症 状	応 急 処 置
I 度	発赤	表皮まで	ヒリヒリした痛み	数日で治癒
II 度	水疱	真皮まで	時に強い疼痛	感染がなければ1～2週間で治癒
III 度	青白色、 皮膚がない	皮下組織まで	疼痛を感じない	数か月を要し、瘢痕が残る 皮膚移植が必要

現場での応急手当

- ①皮膚障害を最小限度でくい止め、痛みを軽減させるために、水道水（図1）やシャワー（図2）などの流水で痛みがなくなるまで患部をまんべんなく冷やします。ただし、乳幼児は冷やしすぎると体温が下がって身ぶるいはじめます。身ぶるいが起きたら冷やすのをやめ、毛布をかけて温めます（体温が32℃以下になると、ショック症状がみられ、不整脈から死に至る危険性も出てきます）。
- ②顔など流水で冷やせない場所は濡れタオルで何回も冷やします。氷は冷たすぎて皮膚が痛くなり、長く冷やし続けることができません。
- ③服の上から熱い液体をかぶった場合は、まず服の上からホースやバケツで冷水をかけ、その後服をはさみで切るなどして取り除き、水を含ませたバスタオルで全身を覆うようにして救急車を呼びましょう。
- ④樹液や油を塗ったり、小さな水ぶくれでも針などでつぶすのは感染の危険があるため、絶対にやめましょう。
- ⑤手や足の熱傷であれば、患部を高くするようにします。

図 1



図 2

